

英語史の知見を活かした英語教育
—映画『ロミオ+ジュリエット』を用いて—
English Education Using Knowledge of English Language
History Interpreted Through the Movie *Romeo + Juliet*

松浦 加寿子
中国学園大学

Kazuko MATSUURA
Chugoku Gakuen University

Abstract

The purpose of this present study is an analysis of lecture which demonstrates how the knowledge of English language history contributes to English education at the university level. The focus of the lecture uses the movie *Romeo + Juliet* (1996) in which characters speak Early Modern English. First, in class, students were asked to write down a series of questions about English that they have wondered over the years since they began studying English. They were then asked to point out the differences between Early Modern English and Modern English, utilizing the movie script from *Romeo + Juliet*. I was able to make convincing explanations in terms of English language history in the following comparisons in the English literature class in early November: 1. Why is the pronoun “I” always capitalized? 2. Why is “went” the past tense of “go” though those words are not related at all? 3. Why are English spelling and pronunciation different? 4. Why do we add “-s” to verbs when the subject is the third person singular? 5. Negative constructions in Early Modern English 6. What is the difference between “you” and “thou” in Early Modern English? Students’ comments after the lecture demonstrated that learning English language history stimulated their curiosity and deepened their understanding of English.

1. はじめに

中学校・高等学校における英語教育の目標の一つとして「実践的なコミュニケーション能力の育成」が掲げられている。また、文部科学省（2017, 2018）によって告示された中学校・高等学校の各学習指導要領解説では、実践的なコミュニケーション能力育成のために、英語の音声や語彙、表現、文法、

言語の働きなどの理解を深める「知識及び技能の習得」や主体的に学習に取り組む「学びに向かう力」などが明記されている。

英語の文法や言語の働きについて理解を深めるには、言語学的に注意深く観察することが必要不可欠である。岡田(2001:3)は、コミュニケーションのツールとして英語を教えることを英語教育の目標に掲げることによって、英語の構造や意味に対して興味・関心が薄れることを危惧しており、言葉としての英語の面白さや言葉の背後にある人間のものの見方や考え方について考えることの重要性を説いている。また、堀田(2016:183)は英語史を学ぶ意義について次の5点を挙げている。

1. 現代英語の文法や語彙が学びやすくなる。今まで関連の見えなかった現象につながりが見えてくる。不合理・不規則に見える現象の根拠を知ることができる。
2. 英語の過去を知ることで、英語の現在と未来を意識するようになる。これにより、能動的・戦略的に英語を学ぶ姿勢が身につく。
3. 言語とは通時的に変わる(change)ものであり、地理的、社会的、語用的な要因により共時的にも替わる(vary)ものであるということ、つまり「言語の無常と多様性」を認識することにより、相対的で寛容的な言語観が形成され、おおらかに英語を学べる、あるいは教えられるようになる。文法や語法の「正誤」もあくまで相対的な判断にすぎないと認識できるようになる。
4. 英語の歴史は1つの物語であるから、話としておもしろい。
5. 「歴史をいくらかでも知らない者は、その人の人間性の重要な側面の1つを欠く者である。歴史が今日の人間を作りあげたのであるから、人間を理解するためにはその過去をいくらかでも知らねばならない」(Bloomfield and Newmark)。

つまり、英語史を学ぶことは現代英語への理解を深めるとともに、学習者の知的好奇心を高め、主体的に英語を学習する態度を育成することができるといえるだろう。これはまさに中学校・高等学校の学習指導要領に掲げられた英語教育の目標にも合致しており、大学生にも適用できると考えられる。そこで本稿では、まず大学生に英語に関する素朴な疑問を尋ね、その疑問に答える形で英語史の知識を提供して知的好奇心を喚起し、さらにシェイクスピア時代の初期近代英語と現代英語の相違点を認識させることで英語に対する理解を深めることが可能かどうか授業実践を通して検証する。

2. 先行研究

近年、中学校・高等学校・大学において、英語史がどのように英語教育に貢献できるかについて注目されている。小迫(2005)は、小学校・中学校・高等学校の英語教員を養成するにあたり、英語の歴史的変遷過程に見られるどのような言語事象が英語教員にとって必須の背景的知識になりうるかについて概観している。具体的には音の連結や綴り字と発音の不一致、文法の歴史などを挙げており、英語教育実践の場での有用性について論じている。寺澤(2008)は、英語史のテーマを幅広く網羅し、現代英語と英語史を関連づけることで英語学習者に有益な情報を与えている。また、doの歴史的発達や借用語といった一般的な英語史のテーマを扱っているだけでなく、世界的な社会現象にもなった

『ハリー・ポッター』の英国版と米国版の英語表現を比較することで文化や社会構造にまで言及している点は非常に興味深い。脇本(2010)は、中学校の教育現場において英語史の知識を応用して「民族(特にケルト民族)」と「借用語」をテーマに異文化理解に繋がる指導法を提案し、言葉への興味・関心を引き出す有効な一つの方法として言葉の背景にある文化や歴史を学ぶ重要性を示唆している。田辺(2017)は、英語学習者が抱きがちな疑問、例えば「なぜ tooth の複数形は teeth なのか?」や「なぜ must に過去形がないのか?」などに対して英語史の知識を用いて解説し、英語を歴史的な視点から学ぶことで現代英語の姿を浮き彫りにすると指摘している。英語教員には英語を教える自信に繋がり、英語学習者に対しては興味・関心を引き出し、学習効果が上がると結論づけている。英語史の知識を用いた授業実践としては、横山(2013, 2014)があり、高等学校で人称代名詞の歴史的变化を提示し、生徒からのさまざまな質問に対して解説を行うことで英語への興味・関心を引き出すことができたとして述べている。

また、2014年には「日本英文学会第86回全国大会」で開催されたシンポジウムにおいて、「グローバル時代の英語教育—英語史からの貢献—」の研究報告がなされている。さらに、2019年度には大修館書店から出版されている『英語教育』で、「英語指導の引き出しを増やす 英語史のツボ」の特集が生まれ、堀田隆一氏によって一年間連載されている。

3. 授業実践の概要

3.1 目的

この数年間を見ても英語史の英語教育への応用について関心が高まっていることは明らかである。そこで本稿では、基礎的な英語史の知識を授業の中で適切に導入し解説することが、学習者の知的好奇心を喚起し、現代英語の理解をより一層深めるために有効であるかどうか検証する。

3.2 対象

本稿の筆者は、2020年度後期に私立大学国際教養学部国際教養学科において、3年生の選択科目である「英米文学概論」の講義を担当した。受講者は、英語コースに所属している者もいれば、ビジネスコースや文化コースに所属している者もいて、学術的関心は極めて幅広い。また、中学校・高等学校の英語教員免許取得希望者も含まれている。本授業実践は「英米文学概論」の受講者23名を対象に、2020年11月上旬に実施した。

3.3 方法

前述した「英米文学概論」では、全15回のうち、前半はイギリス文学、後半はアメリカ文学を扱っている。講義目標は、文学作品の社会的・文化的背景を理解したうえで、文学的な英語表現を理解し、作品を鑑賞できるようになることである。塚本(1997)によると、授業で映像を活用することは学習者の知的好奇心を呼び覚まし、それが英語学習の動機づけになって教育効果が得られることを指摘している。本授業においても映画化されている文学作品をできるだけ選択するようにしている。手順としては、まずシェイクスピアの『ロミオとジュリエット』のあらすじと文化的背景の説明後、映像を通して有名な台詞の場面を視聴した。映画『ロミオとジュリエット』は1964年に製作されたシェイクスピアの作品に忠実な版と1996年に製作された舞台を現代に移した版がある。授業ではジュリエット

の告白場面や最後にロミオとジュリエットの二人が自害する場面などを比較させるため、両者を視聴させたが、本稿では後者の版を選択した。なぜなら、後者の現代版『ロミオ+ジュリエット』は、登場人物が初期近代英語で話していることから現代英語との相違点を指摘できるうえに、現代の設定なので感情移入しやすい点も魅力の一つであるからである。『ロミオとジュリエット』のあらすじを把握した翌週の授業で、まずは英語に関する素朴な疑問をできるだけ多く挙げるように受講者に指示した。また、『ロミオ+ジュリエット』の台詞の中から有名なジュリエットの告白場面をはじめ、現代英語と異なる初期近代英語期の語彙・表現が見られる箇所を抜粋したプリント(付録)を配布し、約20分間時間を取って現代英語と異なる語彙・表現について指摘させ、回収した。さらに、英語史に関する授業実践後、コメントペーパーに授業の感想を具体的に書くように受講者に指示した。なお、プリント(付録)の和訳はスクリーンプレイから出版されている『ロミオ & ジュリエット』に準ずる(曾根田・福永・田中・曾根田・及川, 1998)。和訳の後の括弧内にはテキストのページ数を付している。

4. 英語に関する疑問

本稿で前提となる英語史の時代区分については諸説あるが、一般的に考えられている表1の区分に従う。とりわけ、今回扱う近代英語については、前半の1500-1700までが初期近代英語、後半の1700-1900までが後期近代英語に該当する。

表1 英語史の各時代区分の名称

古英語	449-1100
中英語	1100-1500
近代英語	1500-1900
現代英語	1900-

受講者から英語に関して以下のような疑問が挙げられた。これらの中から数点をピックアップして解説を行った。

- ・語と発音はなぜ異なるのか
- ・Iはなぜ大文字か
- ・footの複数はなぜfeet
- ・過去形はdやedをつければいいのになぜwentなど変わるのか
- ・なぜ三人称単数現在で-sが必要なのか
- ・youとthouには違いがあるのか
- ・“move not”は“don't move”では?
- ・日本語と英語の語順の違い
- ・疑問形はどうして動詞が移動するのか

4.1 なぜ一人称の“**I**”は文中でも大文字なのか

この問いは筆者自身も長年疑問に思っていたことである。古英語の時代には、一人称の“**I**”は小文字で書かれていて、ic→ik→ichと歴史的変遷があったとされている。やがて“ich”の語尾chが脱落し、上に点がない“i”になったが、例えばmやnのような縦棒がある文字と隣接すると埋没したり、間違えたりすることがあったため、11世紀に点がある一人称代名詞“i”が誕生した。しかし、この“i”も視覚的には“i”同様目立たず、“j”を使用していたが、紛らわしさを回避するために大文字の“**I**”が使用されるようになったという歴史的変遷がある。

4.2 なぜ“go”の過去形は“went”なのか

現代英語の不規則活用の動詞の代表ともいえる go-went-gone であるが、過去形の“went”は一体どこからやってきたのだろうか。“gone”は原形“go”との関連性が見えるが、“went”はまったくみられない。これは“go”とほぼ同義語の“wend”（向かう、進む）の過去形“went”に由来する。中英語期頃まで“go”と“wend”が共存し、“go”の過去形として“goed”も使用されていたが、次第に原形“go”が高頻度で使用されるようになるにつれて、ほぼ同義語の原形“wend”と過去形“goed”が衰退し、最終的に“go”の過去形は“went”に取って代わった経緯がある。そのため、現代英語では本来二つのそれぞれまったく異なる語の不規則な活用形を覚えざるを得なくなったのである。

4.3 綴り字と発音の乖離

綴り字と発音が異なる最も主要な要因は、15世紀頃から18世紀頃にかけて起こった大母音推移（Great Vowel Shift）だろう。図1は堀田（2009）が大母音推移の音声変化の過程を簡潔に示したものである。

図1 大母音推移の音声変化の過程

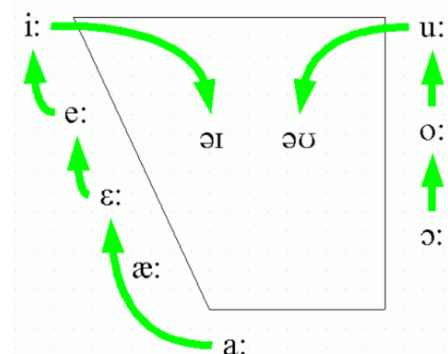


図1の矢印の通り、大母音推移は、「ア」→「エ」、「エ」→「イ」、「オ」→「ウ」のように本来の発音から舌の位置が次第に上昇する現象のことであり、元々調音点が高い母音は「アイ」や「アウ」などのように二重母音化した。具体例としては次の表2が挙げられる。ここでは理解しやすいようにカタカナ表記とする。

表2 各語における発音の変遷

語	大母音推移前	大母音推移後	現代英語
name	ナーメ	ネーム	ネイム
sweet	スウェーテ	スウィート	スウィート
time	ティーメ	タイム	タイム
clean	クレーン	クリーン	クリーン
woman	オーマン	ウーマン	ウーマン

一見暗記するのが難しそうに思えるが、アルファベットの読み方を思い出せば良い。例えば、Aの発音は「アー」ではなく、「エー（エイ）」であり、Eの発音は「エー」ではなく、「イー」というように大母音推移の影響を受けていることが明らかである。このように、大母音推移によって発音は変化したが、綴り字は保持する傾向が強かったため、綴り字と発音の乖離が生まれたのである。もし、学習者が綴り字通りに発音したとしても、教員は「昔はその発音でよかったよ」とフォローし、大母音推移を学習者に説明することで発音体系が少しでも理解しやすくなると思われる。

4.4 なぜ三人称単数現在形で-sが必要なのか

多くの英語学習者は三人称単数現在形の-sを文法規則として覚え、動詞に-sをつけることを忘れないように心がけてきたのではないだろうか。古英語期には、現代英語とは違って動詞は主語の人称、数に応じて異なる語尾を取っていて、それは初期近代英語期でも残存していた。表3は初期近代英語期における各人称の動詞の活用語尾である。

表3 初期近代英語期における各人称の活用語尾

人称	単数	複数
一人称	-e	-ast
二人称	-est	
三人称	-th, -s	

表3のように初期近代英語期には現代英語と異なり、一人称や二人称でも活用語尾が存在していたが、やがて消失して、現代英語では三人称単数現在形のみ語尾が残ったのである。したがって、この問いに対する答えは、三人称単数現在形だけ昔の名残をとどめていると言った方がいいだろう。

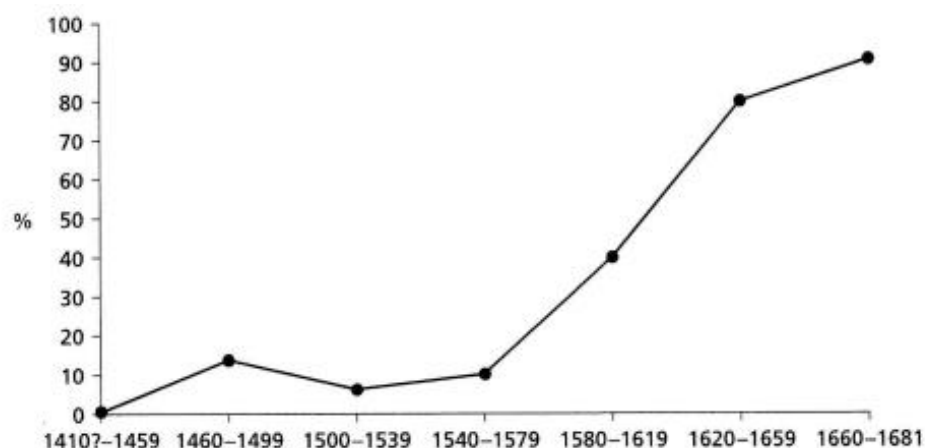
前述したように、付録は映画『ロミオ+ジュリエット』から語彙や文法が現代英語と異なる箇所を抜粋したものであり、例(1)はまさしく初期近代英語期における三人称単数現在形の語尾-thが使われている例である。下線は筆者が強調のために引いたものである。

(1) Mercutio: Sometime she driveth o'er a soldier's neck and then dreams he of cutting foreign throats...

文の後半は現代英語と同様に-s語尾が用いられており、-th語尾から-s語尾への過渡期であることが見て取れる。受講者23名中、13名が-th語尾を指摘し、三人称単数現在形の-s語尾であることも推測で

きていた。Nevalainen and Raumolin-Brunberg (2003: 68) が *The Corpus of Early English Correspondence* (CEEC) に基づいて作成した図2は、haveとdoを除く三人称単数現在形-th語尾の-s語尾への言語変化を示している。

図2 三人称単数現在形-th語尾の-s語尾への言語変化 (haveとdoは除外)



とりわけ、『ロミオとジュリエット』がシェイクスピアによって書かれた初期近代英語期の1595年頃、三人称単数現在形の-s語尾が急激に台頭してきたことが顕著である。田辺 (2015) は、『ロミオとジュリエット』における一般動詞の三人称単数現在形の-th語尾と-s語尾の使い分けについて、登場人物の社会階級や性別が選択のうえで重要なファクターになっていることを指摘している。作品中、-th語尾は9例のみで他はすべて-s語尾であった。また、-th語尾は9例中、女性のジュリエットが1回使用したのみで他はすべて男性が使用していることから、男性の保守性と女性が-s語尾を牽引した可能性があると結論づけている。さらに、福元 (2018) をはじめ多くの研究者が-th語尾は格調の高さを表す古語であると述べている。

ここで、再度例 (1) に話を戻してみよう。前半の主語、“she” は人間の夢を支配するアイルランドの伝説の女王、マブ女王であり、後半の主語、“he” は兵士である。つまり、兵士の語尾に-sを使い、マブ女王に-th語尾を使うことで女王としての格調の高さを示すことができ、巧みに使い分けられているといえるだろう。

また、シェイクスピアとほぼ同時期に書かれ、1611年に刊行された『欽定訳聖書』(King James Version) は-th語尾が多く見られる。堀田 (2011) は、『欽定訳聖書』の言語が古風な理由として、非日常的な言語を使用することで宗教的な神秘性、ありがたみが感じられることや教義の普遍性に対応して言語も不変・普遍でなければならないことなどを挙げている。さらに、一般的にシェイクスピアは革新的、『欽定訳聖書』は保守的な言葉遣いが多いことも堀田 (2019) は指摘している。例えば、授業では『ロミオとジュリエット』や『欽定訳聖書』とその現代英語訳を比較し、ペアになって互いに音読することで、初期近代英語期の英語を味わうとともに三人称単数現在形の語尾の重要性について再認識することができるだろう。

4.5 初期近代英語期の否定構造

付録の例(2)は一般動詞の否定の際に、動詞の直後に否定辞notが置かれている例である。

(2) Romeo: Then move not while my prayer's effect I take.

受講者23名中、12名が現代英語との否定文の違いを指摘できていた。現代英語では、一般動詞の否定文や疑問文では助動詞doが用いられるが、初期近代英語期はdoを用いるdo迂言法が台頭してきた時期であり、doを用いない非迂言法も共存する過渡期である。Ellegård (1953: 162) はdo迂言法の歴史的拡大について、最初に否定疑問文、次に肯定疑問文、その後やや遅れて否定平叙文、最後に否定命令文にdo迂言法の新規則が適用されたことを指摘している。寺澤 (2008: 133-134) は否定文や疑問文におけるdo迂言法の発達に関して、SVOの語順を保持できる統語上の理由を挙げている。一般動詞の否定文や疑問文におけるdo迂言法の確立は一見複雑化したように思えるが、語順の固定化に貢献し、doを人称によって屈折させるだけで個々の動詞の語尾変化を暗記する手間が省けたことを考慮すると、英文法を教える立場からも英語はより簡素化したといえるだろう。

4.6 初期近代英語期のyouとthouに違いはあるのか

付録の例(3)にある『ロミオ+ジュリエット』で最も有名なジュリエットの台詞を見てみよう。

(3) Juliet: Romeo. Oh, Romeo. Wherefore art thou Romeo?

受講者23名中、20名が古語のthouやthy、thysselfを指摘できていた。福元 (2018) をはじめ多くの研究者が指摘しているように、thouは親称で、youは敬称として初期近代英語期には使い分けられていた。ジュリエットがロミオに愛を告白する場面においてthouではなく、youであれば心的距離を感じてしまっていただろう。また、ロミオとジュリエットが初めて出会うパーティーの場面では、ジュリエットがロミオに対してyouを使用していることもよく論じられている。

他の例を挙げる。ジュリエットの母親であるグロリアが自分の子どもに対してthouを使うのは親しい仲なので自然である。しかし、ジュリエットにパリスとの結婚を勧める場面で、ジュリエットの年齢で結婚していたグロリアは、未婚のジュリエットに“You are now a maid.”とyouを使用することでジュリエットを突き放していることがわかる。敬称のyouは現代英語の“Your Majesty”などに名残が見られることも言及できるだろう。

5. 授業実践後の学生のコメント

毎回授業の最後に、学生にはコメントペーパーの提出を求めており、今回は英語史に関することに焦点を当てて書くように指示した。一部を抜粋する。

・日本語にも歴史があるように英語にも歴史があって、映画(文学作品)などを通して実感し学べるのはすごくいいなと思いました。

・英語は中学校の時に好きになって教職を目指すことにしました。でも、素朴な疑問を無視し、解決することなく今日まで来てしまいました。今回、Iのことを知り、昔のことが大きく関わっていると分かったので、英語の始まりからまた学んでみたいと思いました。

- ・Iを文中でも大文字で書くことは当たり前だと思っていたけど、確かに不思議だと思った。英語の単語も衰退していくことを知って驚いた。今、自分が使っている英単語も何百年、何千年もしたら変わっていくこともあるのかなと感じた。
- ・自分でも驚くほど英語に対する疑問は考えてみればみるほど見つけることができました。日本語と比べてみてもやはり英語は日本語と大きな違いがあるなと感じました。それが言語は国の文化を反映していて面白い所だなと思います。
- ・昔はnameをナーメと呼んでいた時代があったが、時代が進むにつれて変化していったのが面白かったです。また、iを大文字にするのは隣接する文字によってはmに見えてしまうからと思っていたより単純でびっくりしました。ロミオとジュリエットの話ではyouをthouに言い換えてちゃんと“愛している”というのを伝えているのがステキだなと思いました。また、今と昔の英語は似ているようで似ていないため、訳するのが少し難しかったけど、楽しかったです。
- ・Iが文中でも大文字だと聞いて確かにと思いました。私たち大学生は英語を学び始めてから数年が経つので、最初の頃疑問に思っていたことも「そういうもの」だと思って学んできているので、急に聞かれると出て来ないものだなあと思いました。小学生や中学生に聞いた方がたくさん出て来て面白そうだと思います。私が小・中学生のときにこういう話が聞けていたらもっと英語に関心を持っていたかもしれません。

6. おわりに

本稿では、学習者が英語に関して抱く疑問を解説したり、映画『ロミオ+ジュリエット』に見られる初期近代英語期の英語を観察したりする際に、英語史の知識を適切に導入することで学習者の知的好奇心を喚起し、現代英語に対する理解を深めることができるかどうかについて検証を行った。結果としては、学生全員から好意的な感想やコメントを得ることができたことから学生の英語への知的好奇心を喚起することができたことがうかがえる。また、学生によっては英語学習の意欲もかき立てることができたようである。英語史の知識のみ学習者に提供するのではなく、文学作品などから実例を挙げながら解説を行うことでより一層理解を深めることができ、有効であると考えられる。

学習者の中には、語彙や文法規則を躊躇なく受け入れ、英語学習を進めていける人もいるだろう。しかし、前章の最後の学生の感想のように、英語を学び始めた時には英語に関する素朴な疑問が多く浮かんでいたはずなのに、勉強を進めるうちに目の前の試験などに追われていつの間にか疑問が消えたり、「ルールだから仕方ない」の一言で終わらせたりするのは勿体ない。ましてや教員が英語史の知識を持ち合わせてなく、学習者の質問に答えられないことで知的好奇心の芽を摘むことがあっては決してならない。われわれ教員は学習者の英語に関する素朴な疑問に答える役割を担っている。だからといって、英語史の専門的な知識を提供して消化不良になっては英語嫌いを助長させかねない。学習者の興味や関心、レベルに応じて適切な形で授業に取り入れることができれば、英語史は英語教育に寄与できると確信している。本授業実践がその一助になれば幸いである。

引用文献

- 岡田伸夫 (2001). 『英語教育と英文法の接点』 京都: 美誠社.
- 小迫勝 (2005). 「英語の歴史に基づいた英語教育内容学の構築に向けて」 松畑熙一先生退官記念論文集編集委員会 (編) 『英語教育実践学』 241-249. 東京: 開隆堂.
- 曾根田憲三・福永保代・田中長子・曾根田純子・及川学 (1998). 『名作映画完全セリフ集 スクリーンプレイシリーズ 86 ロミオ & ジュリエット』 名古屋: フォーイン スクリーンプレイ事業部.
- 田辺春美 (2015). 「Shakespeare の英語における 3 人称単数現在形語尾について—*Romeo and Juliet* の場合—」 『成蹊英語英文学研究』 第 19 号, 49-67.
- 田辺春美 (2017). 「英語史は役に立つか?—英語教育における英語史の貢献—」 『成蹊英語英文学研究』 第 21 号, 95-113.
- 寺澤盾 (2008). 『英語の歴史—過去から未来への物語』 東京: 中央公論新社.
- 塚本美恵子 (1997). 「『映画の吹き替え授業』と『映画で教える異文化理解』」 『映画英語教育研究』 第 3 号, 81-86.
- 堀田隆一 (2016). 『英語の「なぜ?」に答える はじめての英語史』 東京: 研究社.
- 堀田隆一 (2019). 「英語指導の引き出しを増やす 英語史のツボ」 『英語教育』 東京: 大修館書店.
- 福元広二 (2018). 「Shakespeare の英語」 片見彰夫・川端朋広・山本史歩子 (編) 『英語教師のための英語史』 133-160. 東京: 開拓社.
- 横山利夫 (2013). 「英語教育と英語史」 『山形県立米沢女子短期大学附属生活文化研究所報告』 第 40 号, 85-91.
- 横山利夫 (2014). 「英語教育と英語史—高等学校での授業実践報告—」 『山形県立米沢女子短期大学附属生活文化研究所報告』 第 41 号, 29-37.
- 脇本恭子 (2010). 「英語史を通して学ぶ異文化・自文化理解—実践的指導に向けた英語学領域からのアプローチ—」 小迫勝・瀬田幸人・福永信哲・脇本恭子 (編) 『英語教育への新たな挑戦—英語教師の視点から—』 45-59. 東京: 英宝社.
- Ellegård, A. (1953). *The Auxiliary 'Do': The Establishment and Regulation of Its Use in English*. Stockholm: Almqvist and Wiksell.
- Nevalainen, T., & Raumolin-Brunberg, H. (2003). *Historical Sociolinguistics: Language Change in Tudor and Stuart England*. London: Pearson Education.
- 日本英文学会 (2014). 「第 86 回全国大会概要」
<http://www.elsj.org/before2020/meeting/86th/86meeting.html>. (最終閲覧日: 2020 年 11 月 10 日).
- 堀田隆一 (2009). 「hellog~英語史ブログ #205. 大母音推移」
<http://user.keio.ac.jp/~rhotta/hellog/2009-11-18-1.html>. (最終閲覧日: 2020 年 11 月 10 日).
- 堀田隆一 (2011). 「hellog~英語史ブログ #753. なぜ宗教の言語は古めかしいか」
<http://user.keio.ac.jp/~rhotta/hellog/2011-05-20-1.html>. (最終閲覧日: 2020 年 11 月 10 日).
- 堀田隆一 (2019). 「hellog~英語史ブログ #3580. シェイクスピアと欽定訳聖書の新旧語形」
<http://user.keio.ac.jp/~rhotta/hellog/2019-02-14-1.html>. (最終閲覧日: 2020 年 11 月 10 日).
- 文部科学省 (2017). 「【外国語英語編】中学校学習指導要領解説」

https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afiedfile/2019/03/18/1387018_010.pdf. (最終閲覧日 : 2020 年 11 月 10 日) .

文部科学省 (2018) . 「【外国語英語編】高等学校学習指導要領解説」

http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afiedfile/2019/03/28/1407073_09_1_1.pdf. (最終閲覧日 : 2020 年 11 月 10 日) .

映画 DVD

Luhrmann, B., Martinelli, G. (Producers) & Luhrmann, B. (Director). (1996). *Romeo + Juliet* [Motion picture]. United States: Twentieth Century Fox.

(付録) 映画『ロミオ+ジュリエット』に見られる台詞の抜粋

以下の映画『ロミオ+ジュリエット』の台詞を読み、現代英語と異なる単語や表現に丸をして具体的に指摘しなさい。

(1)

Mercutio: Sometime she driveth o'er a soldier's neck and then dreams he of cutting foreign throats...

マキューシオ：ときには、兵士の首筋を通り抜けるが、そんなとき、兵士の見る夢は、よそ者の咽をかき切る夢... (46-47)

(2)

Juliet: Saints do not move, though grant for prayers' sake.

ジュリエット：聖者の心は動きませんわ、たとえ祈りにほだされても。

Romeo: Then move not while my prayer's effect I take.

ロミオ：それじゃ、僕が祈りの御利益を得る間、動かないで。(58-59)

(3)

Juliet: Romeo. Oh, Romeo. Wherefore art thou Romeo?

ジュリエット：ロミオ。ああ、ロミオ。なぜあなたはロミオなの？

Juliet: Deny thy father and refuse thy name. Or if thou wilt not, be but sworn my love and I'll no longer be a Capulet.

ジュリエット：お父様と縁を切って、その名前を捨てて。それとも、それが嫌なら、せめて私の恋人だと誓ってほしい、そうすれば私は今を限りにキャピュレットの名を捨てるわ。

Romeo: Shall I hear more, or shall I speak at this?

ロミオ：もっと聞いていようか、それとも声を掛けようか？

Juliet: 'Tis but thy name that is my enemy. Thou art thyself, though not a Montague.

ジュリエット：私の仇敵はあなたの名前だけ。あなたがモンタギュー家の人でなくても、あなた自身に変わりはないわ。

Juliet: What's Montague? It is not hand, nor foot, nor arm, nor face, nor any other part belonging to a man. Oh, be some other name.

ジュリエット：モンタギューって何なの？それって手でもなければ、足でもない。腕でも、顔でも、人間の身体のどんな部分でもない。だから、何か他の名前になって。

Juliet: What's in a name? That which we call a rose, by any other word would smell as sweet. So Romeo would, were he not Romeo called, retain that dear perfection which he owes without that title.

ジュリエット：名前って一体何なの？私たちがバラと呼んでいるあの花も、別の名前と呼ばれたって、甘い香りに変わりはないはず。だからロミオだって、たとえロミオと呼ばれなくても、あの非の打ち所のない尊さが失せたりはしない。そんな名前、なくたって。

(66-69)